

雑詠日記

徐山猿声

卷の六

一九九三年

市井一人

ヴァレリーが、マラルメと詩について語った見事な文章がある。

「言葉の感覺的の形態とその思想への交換価値との間に、何かわからぬ神秘的結合、調和の如きものが存在し、それによつて我々が言葉と行為との互いに応ずる世界とは全く異なつた他の世界に参与するという、強烈なしかもある時間持続する、印象を生ぜしめること……。詩とは成長の持続であり、時間の中に置かれた一凶形の如きものである。そして自然な詩的事実とは、精神に浮かんでくる音と影像との混乱の中に於ける例外的遭遇に他ならない……。これらのあらゆる場合に於いて、声の抑揚と緩急とは、声の喚起する觀念的なものに打ち勝つてしまふ。即ち、それは、われわれの精神に呼びかけるより以上に、われわれの生命に呼びかけるのである……。詩歌とはこの二つの（事実を伝達すること、情緒を生ぜしめること）機能の和解契約すなわちある一定の比例である……。あらゆる本当の詩人に於いて太古さながらの人間を見いだすのである。その人は、今なお言語の泉に飲む。「詩句」を創造するのである」

ヴァレリーが本当の詩人について語る「自己の尺度をもつて己を測り、自己の明智に従つて己を改造して行く一人の人間は、あらゆる他のものに勝つて私を感動させる傑れた一著作のように思われる」という言葉を普遍化して、明智を持たぬが人間である者への励ましとし、「心の中に懐いている一世界に於いて、他の誰一人として代わることの出来ない場所を満たしている」と考えたいではないか。

一月二日

正月の山行 木魂響く森

(行方不明になった人を集落総出で捜索)

一月三日

要の人亡くした家の正月は鯰の刺身も男手がする

一月五日

三十二年前を想い出す事があり、その場所に立った。

正月の菜の花 時の巡る場所

一月八日

自転車のかごに花束松明ける

(友人から電話、会いに行く)

一月十四日

一株の梅や地名は梅林

一月十六日

太陽が白く凍えて静思する

底冷えの土曜の午後の一仕事

一月十八日

睥睨する鳥は胸張る冬の雨

一月二十日

大寒の一番星の清冽さ

一月二十六日

冬の空笑う三日月よい日暮れ

オリオンを指し。ペダルをこぐ家路

一月二十七日

仕事に倦んで部屋を歩けば
花のかんばせ 百合咲くよ

今は一月 外は雪

季節を過ぎて咲く花を

見習うことも出来ない定め

すでにわたしのかんばせ褪せる

努めはげむ者だけが

短い生を結晶させて

長くその美をとどめうる

無形のかんばせ

二月一日

一筋の電話の線の頼りなさ健忘の母と禪問答する

二月十九日

風邪癒えて早春を嗅ぐ 沈丁花

二月二十日

祖母と孫椿の色に染まる春

二月二十三日

ウゴルスキーという人の奏く「展覧会の絵」を聴きながら、

聞け

風が泣いているのを

春の風を逐いちらかして

冬の風が吹きまくっているのを

聞こえないか

風が何か語っているのが

旗ざし物がハタハタと

はためいて答えているのが

見よ

流れ去る小雪を

風の語ることを 雪の精が

視覚化しているその楽譜を

ほら

らせんの水差しの花が

そのコードを読み解いている

その花卉の集音器を広げて

『人間への進化』という本を読んでいるせいでこんな言葉が出てきた。生物界の進化は、実存としての個々の生命のほとんど無意味を永く永く積み重ねて行われた。

二月二十六日

停年を迎えた人を送る会同じく送るわが二十年

二月二十七日

野に出でよ山には春の狼煙立つ

二月二十八日

限りなくいとおしいこの人生を弦にたとえた映画見果てず

世界見る眼は開かれず二月尽

三月一日

春の雪乱れて淡いいのち解く

焼き芋の汽笛と匂い余寒する

三月九日

槌音に春聞きツバメ棟よぎる

三月十日

若き桃灯ともし頃に列組んで

三月十三日

鶯のつたない声に前途あり

三月十四日

三か月来はじめて野に出る。

風流のはじめに春の風を吸う

春すでに深く耕す土とある

なごむ風畦を巡って春囲う

能古と志賀見晴らす丘の春の野辺巢立ちを前の娘と歩む

三月十五日

百千の木蓮宵に咲くこの世

三月十七日

山頂に予期せぬ雪の彼岸入り

三月十九日

杉木立映る水面にさざめきをかすかに起こし山桜咲く

浮き雲もうたた寝の春自由なる

どの竹も彼岸入り日におじぎする

山陰のあせびが点す希望の灯

三月二十一日

幣立てる土地を鎮めて巡る春

三月二十九日

昨夕から仙台に来ている。ホテルから青葉城趾まで雪の中を歩く。広瀬川沿いの公園の大きな梅の木々に紅白の花が咲き、それへ春の雪が舞いかかる。

三月三十日

陸奥のもてなし遅い梅と雪

旅人に春は弥生の雪の杜

昨日一仕事済ませたこともあり、残雪に誘われてO氏と平泉へ。毛越寺は、一つの小国家を目指した政権の象徴的建造物、宮殿の意味がこめられていたのかもしれない。昼食後、意味深長な「御所」跡を探して行く。芭蕉の時代に既に人家や畠になっていたところだから、まして今は感興を興し難い。ただ案内の立札があるだけだ。無量光院跡では、人もいなくてさかんに犬が吠えたてた。

高館に登り北上川を望む。義経最後の地は、杉の木の根元に昨日の雪が残り、南流する北上川の湾曲した流れが、春の気配を漂わせて静かにゆるやかに時を巡らせている。東の山の頂きも白く、北ははるか遠く山々が連なり、平泉の地が交通の要衝であったことをうかがわせる。芭蕉の感慨に共感する気分が胸に広がる。今は義経も芭蕉も遠い人となった。北上川だけが物言わず水をたたえている。ある時、ある場所で、人がどのようにその生に意味を与えようとするか、それが問題なのだ。

残雪が土へと帰る義経堂

北上の流れゆるやか遅い春

国道を横切って中尊寺に出る。弁慶のといわれる墓のところから月見坂を上っていく。杉の大木が並ぶ。弁慶堂に靴を脱いであがったら、床板の冷たさが足に伝わってくる。ここにも同じ顔をした義経像がある。同じ時期に作られたものだろうか。仁王立ちの弁慶像と並んで英雄達を偲ぶよすがとするためだろうが、人間の想像力が精神の中で描くイメージや感興のほうがはるかに勝ると思う。本堂を見て金色堂へ。具象化された浄土であるこの堂の須弥壇の中に清衡、基衡、秀衡の遺体と泰衡の首級が納められている。遺体は浄土にいるわけだ。東北地方には活仏の風習があつた。超越を目指すその精神はどのような境地にあつたのだろうか。

佇立する弁慶堂に足冷える

木漏れ陽や杉の根元の春の雪

(光堂にて)

四月一日

宮城県立美術館で佐藤忠良の彫刻を見た。優れた具象彫刻にはやはり味わいがある。顔を像に近づけて見ると、青銅の堅い人物像も元の塑像の柔らかさが

感じられ、人間の身心の動きの一瞬に永い時が与えられてそこに現存しはじめ、人の顔の輪郭を超えて存在の息吹を感じるような気さえしてくる。

近づけば頬動かして息をする青銅の顔時超え生きる

四月三日

娘を横浜において帰省。

内海の水にくずれるおぼろ月

傘をさす月は静まる 子は遠い

四月十日

夏柑の影で地蔵が花見する

しやくなげと桜と地蔵酌み交わす

四月十三日

花冷えは花のいのちに温かく

四月十六日

八女の山中のホテルに來ている。古い町家の移築されたのを見て、

町の家今はあせびと山にある

四月十七日

跌倒すれば胸にさえずり春の山

結跏趺座 座禪の部屋に鶯の声渡り来て静寂勝る

四月二十六日

鋤かえず田に土香る めざめあれ

四月二十七日

大でまり小でまり一つの水に生け

四月三十日

春の田に水導いて日は巡る

五月六日

忙しい連休が明けていつもより早く家を出る。ここのところ軽快な自転車で快適に通勤している。危険は思わぬところにある。見通しのよい長い坂をとばしていたら、急に小学生が左右も見ずに道を横断しようとした。急ブレーキをかけたら、前輪によけいにブレーキが効いて、運動量がかなり残ったまま、前輪の接地点を回転の一時中心として回転し、斜め上方に投げ出された。宙を飛んでいると思った次の瞬間には地面に落ちていた。鼻血が溢れるほど出ている

ことだけを意識している。通りがかりの親切な女性が車に乗せて病院に連れて行くと言ってくれる。自転車をそのワゴンに乗せてくれている間に、当の小学生が車の窓越しに心配そうにこちらをみているから、鼻血をハンカチで押さえながら大丈夫だとうなずいてみせた。病院に行くまでに二度その女性に名前を聞いたが答えてくれなかった。看護婦に自転車を預け、家内に電話で事故を知らせてくれたと後で知る。

医者が処置を始めて分かったことは、鼻と口の上の二箇所が大きな傷らしいということであった。その部位を麻酔され何針か縫われた。他の擦り傷など顔中絆創膏でひどい様になった。鼻の骨は折れていた。左二の腕は骨折はしていないが、打撲で筋肉を痛めたらしくほとんど思うように動かない。一旦耳鼻科に行つて帰つて来たら、医者が出血を心配して点滴をしましょうと言つて、生まれて初めて点滴なるものをされた。家に帰つたのは二時くらいであった。病院で待たされる間自分でもがまん強く待っていると思つていたが、傷や打つたところが痛んで身心が平常心でなかつたのであろう。しかし、その時は痛みをそれほどには感じていなかったようにも思う。夕方まで少し眠つた。

夜寝入るまでにいろいろのことを考えていた。五年前に左掌をガラスのコップで傷つけた時には、ちょうど『パンセ』を読んでいて「心に割礼を受けた者」という言葉を思い浮かべ、掌のそれに対応させて考えていた。今度は、キエル

ケゴール『死に至る病』を読んだ後で「つまづき」ということをあれこれ考えた。わたしはつまづいたのだと。たとえば、わたしの仕事上の一つのアイディアもあるいはわたしに起こり来ることは、諸関係が結んだ恵みと受け取るような心境になるのでなければ、つまづくであろうと。しかしまた、わたしは仏教的にも考えることになる……。

傷病中の作、

身体を我損なう 若葉萌えよ

蝶よ蜂よ 光あまねき地に遊べ

五月二十四日

傷ついた身体に小康を得て

無数のいのちの流れに回帰すれば

わたしの不在の間に春の花々は成熟へと移り

今は、あのバラが赤い輝きに自ら陶醉する季節

ああ、早苗が風にふるえている

五月二十六日
眼前にバラの空間不思議なる

五月二十九日
思い満つシヨパンが開く花菖蒲

五月三十一日
じゃがいもの花誇らしく土とある

卯の花が散って唇厚い顔

六月一日
終業の鐘六月を告げる時苦闘して書くイントロダクション

六月二日
梅雨入りに月流すほど吹く嵐

六月四日
ほしいままに食の月消す梅雨の雲
(期待していた皆既月食を雲が食う)

六月六日
散策の百足とケラに初夏の風

用水の音に血流和む坂

ぐみの実の鈴鳴る空は臯月晴れ

六月七日

一仕事終えて部屋に戻ったら、朝もらった菖蒲の花がまさに咲き開いていた。思わず触れてみる。この薄い微妙な何とも言い表し難い紫の花弁の数々。見つめていたら引き込まれて、やるべき予定があつたのを放り出して、色鉛筆を取り出してスケッチブックに描き始めた。時とともにあつて時の経つのを忘れた一時間二十分。時間は、カントによれば内感に関係した先験的形式だということ。描くことは外感を空間の形式に捉えることであり、熱中している時には外感内感は一切に総合され、花とわたしと一体になっているのだ・・・。

拙ない思惟よりも何よりも貴重な一時を得た。

触れるは禁忌 美を尽くす花菖蒲

花菖蒲わたしと秘密交わす時

六月十日

時失う時の記念日難き生

六月十一日

風うまし櫂の梢であつたなら

六月十三日

細かな座標を付した鉛直な地平もまた
生ある者たちの静かな舞台

小竜が尾を丸めながら揺らしているのは

食たる夜の天使を捕らえようと間合いを計っているのだ

その喉を脈動させながら。

かたわらで、時を司る異形の者が

ある者にはやさしく、またある者には切迫した

厳かな調子で空間に変化を促す。

詩とは、成長の持続であり、時間の中に置かれた一図形の如きものである。

そして自然な詩的事実とは、精神に浮かんでくる音と影像との混乱の中に於ける例外的遭遇に他ならない……ヴァレリー。

六月十六日

門出れば燕地を這う煙る朝

六月十八日

あじさいは土の姿を咲かす花

六月二十一日

忙しい日々を暮らして降り積もる記憶の中にふと光るもの

巡る旅生を尋ねて夏至超える

六月二十二日

軒の梅雨耳そばだてる犬の顔

六月二十九日

紅茶嗅ぎ都の雨を凝視する

七月一日

おはようとかぼちやの玉は拳ほど

七月二日

雨に沈む山の底なる棲家出る

七月六日

一日に恵まれ木槿花閉じる

七月八日

深緑山壁描き梅雨明ける

七月九日

人や犬そこかしこに語る夏の夜

七月十日

夏期休暇始まる土曜静寂に廊下を歩むわが音響く

あこがれて朝顔のつる宙に巻く

市博物館へ『中国王朝の誕生展』を見に行く。

文明はかくも不条理悲痛なる叫びをあげる骸骨の顎

(殉死！)

緑青の鼎の描くふくらみは美と鈍重の合金として

七月十一日

共に読む蛍光灯を下りて来た微小の蜘蛛と「世界」という本

七月二十二日

寒い夏はぐれ鳥が家路指す

白木樅赤い小さなサンダルと並ぶ夕べの生け垣の下

七月二十七日

高く飛ぶ燕は独り肩の凝る

七月三十日

夏草の穂先の重み陽の恵み

遠花火見終えて月も楽しげな

七月三十一日

夏入り日木槿の垣は刈り込まれ白い花一つ涼やかにある

八月四日

向日葵が首うなだれる冷夏かな

落語を四題聞く。志ん朝、仁鶴、小三治、米朝。

八月八日

菊池溪谷、阿蘇大観望、熊牧場を巡る。西日本けとばす会。

蝉の声脚下に求め谷下る

露とある空蝉谷の草の上

空蝉の身に灌の音鳴り響く

殻を出て谷裂く川を超える蝉

瀧つぼに魅入られて散る夏木の葉

尊厳を忘れた熊と眼を合わす阿蘇の夏草やさしい緑

八月十一日
待ちかねた夏の日戻る八月に百舌鳴き渡り夏を励ます

夏陽射し戻れば薨耀いて蜻蛉の翅は深紅に染まる

八月十七日
また長雨に戻る。雷。

露草に冷夏の雨は余りけり

鳴る神の冷夏に抗す蟬の声

あれこれと策練る机上蜘蛛が這う雨の夕暮れ支えを探る

八月二十八日
長雨の夏既に行くせめてもの陽光山の木々いつくしむ

八月三十一日

ひたむきにまだ夢を追う蝶に秋

鬼やんま桜の枝に仏のごと

こおろぎの声昇り行く天の月

(十五夜)

九月四日

台風が去って被害の報続く朝霧の中法師蝉鳴く

九月五日

天見上げ大往生の鬼やんま

九月九日

アサガオの小さな青に路地の秋

九月十二日

今年のベルリン映画祭でグランプリを獲得した台湾映画『ウエディング・バンケット』と中国映画『香魂女』を観た。

小さな蝶が 萩の花びらのように草の上にやすらい
 翡翠の尾を持つ糸トンボが 水の流れのように飛ぶ
 もう刈り取られた早稲の田のかたわらで

九月十四日

黄と白の彼岸花が 燃える赤を秘めて咲いている

虫の音にヤモリは首を揺らし和す

九月十五日

虫すだく教筒埋めた寺の跡

寺山：「短歌ってどうやっても自己複製化して、対象を肯定するから、カオ

スにならない。風穴の吹き抜け場所がなくなってしまう」

柄谷：「短歌というのは、どうやっても内面的になるでしょう」

寺山：「内面自体に対する疑いを抱かず、それがあつたものだといふ楽天的な

前提に立つて、表層部分だけをなぞるところがある」

柄谷：「短歌的なものとは、いわば五七五としてひらかれたものを七七によ

つて回収し内的に閉じてしまう装置である。そこには、他者を欠くが

ゆえに安定した「自己」があり・・・」

九月十六日

野の花が無心にピアノ聞く 秋と

九月二十三日

幾歳になつても迷う我ながらこの御しがたい心の動き

九月二十六日

カメラを提げて散歩。アキアカネの目に沁みるほどの赤、クモとその細い糸の網、木立を透かして射し込む秋の陽に光るせせらぎ、絞り4のズームレンズでは明るさが足りないと警告を発する林の暗さの中で、一枚だけ黄ばんだ大きな葉に斜めに陽が照らして浮き立たせているのに、シャッターを切った。

鞆鞆が鶏頭とある庭の秋

イヌタデも野辺の華やぎ蝶とまる

秋風を捕らえて揺れる蜘蛛の網

木漏れ日に光るせせらぎ白い秋

木漏れ日にアカネ射ぬかれ静止する

九月二十八日

黒い猫白い鷺追う藁干す田

十月一日

大分からの帰途、小鹿田の里に寄り、小さな花瓶を買う。

土にゴットン、秋の小鹿田の杵の音

秋の陽に受胎しつつある土の壺

十月四日

口中に少年の日々アケビ食う

十月六日

コスモス！大千世界に満ちて咲け

十月八日

金木犀幾ヨージヤナも地を被え

十月九日

そこだけは朝日が照らす竹の春

十月十一日

残照をたよりに帰鳥山越える

夕闇に送電線の鉄塔はたしかに任務果たしつつあり

十月十二日

九州交響楽団定期演奏会。

フルートを吹く白い腕リズムとる人は為しうるながしかほど

十月十五日

コスモスの花の数ほど虫の声

空・無相・無願の法に住しなさい。

十月十七日

コスモスの眼下に海の中の道

彼岸までコスモスの中巡り行け

狼煙台立てば波無き秋の海

十月十八日

コスモスの美を成就して壺の円

(小鹿田焼の花瓶)

十月十九日

夕焼けに三日月 至福近く有り

十月二十五日

子と犬と影絵が遊び匂う藁

十月二十八日

難中の難死と向き合うは秋深し

(「死と向き合う」という記事)

十月二十九日

今年また相撲の幟秋の雨

十月三十日

長崎県川棚町に来ている。大村湾のそば。

夕焼けて内海はやがて月の色

旅枕虫の音に寄す波の音

十一月三日

文化の日の今日は、朝食をすませて県立美術館へ「アジア文明交流展」を見に行く。開館よりも早く着いたので、公園のベンチに腰掛けてコスモスを見ていた。家を捨てた男が二人ベンチに寝ている。青虫が敷石の地面を尺をとりながら進んで行く。向こうの植え込みまでは距離がある。果敢な行動ではないか。あるいは、五体投地で進む巡礼者か。

晩秋の公園 尺とり進む虫

手をつなぐ若者二人公園を秋の陽受けてのびやかに行く

それぞれに希望を持って進んでいた。そして青虫は乙女の足の下にいのちを終えた。十分ほどの間に、世界という舞台の一つのドラマに立ち会った。

つづいて、市美術館の「上海博物館展」へ行く。

黄葉に幾たびの秋滞留す

蘇東坡の書は千年の秋に耐え

私たちが知識の中で失った知恵は、どこにある？
私たちが情報の中で失った知識は、どこにある？

∴ T・S・エリオット

十一月七日

赤い櫛柿の実と色競い合う

しぐれ道風土の中にあるを知る

十一月十三日

時雨降る寒気と暖気争う日

一いくさ肚の底から湧き上がる勇気を求め髪整える

十一月十六日

『新古今』恋歌読んで夢に入り夜半に目覚める不安の時代

十一月十七日

九州交響楽団定期演奏会。ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第一番」、ラフマニーノフ「交響曲第二番」。車が混んで遅れたので、湾岸館、であわただしくハンバーガーを一つかじる。

ベイサイド夢追い人にイルージョン

イルミネーション見つつほおばるハンバーガー

玉響の音に無相の願いあり

十一月二十一日

日本庭園内の茶亭で開かれた茶会へ、妻のお供で。床の軸に、「日々是好日」、「無事」、「松風供一服」。

濡れ縁にもみじ一葉茶席待つ

冬の茶事無用の用の長きせる

十一月二十七日

遠回りして河畔を通って帰る。

川行かずよどみの鴨の永い日々

小春日の夕べの祈り鴨の群れ

十一月二十八日

枯れ野にも赤い野いちご実りあり

草の実を足に散策人と犬

十二月一日

小児ほどの銀杏黄金に燃えて立つ

十二月三日
降りかかる櫛の落ち葉今何かつぶやき残す耳よぎる時

十二月五日
冬の陽や紅茶の湯気の遊戯の舞

十二月九日
霜下りて冬の川音透き通る

十二月十五日
外灯に照らされ壁に冬の柿

十二月十六日
白鷺は寒中修行川の中

十二月十八日
太き音ゆるがぬ意志を歌い出せばやがて広がる共鳴の波

(音楽会)

十二月二十一日
木枯らしは人事をかくも追い散らす

十二月二十二日
成しとげたことも少なく冬至来て遠山隠し初雪が降る

親戚の者の訃報が入った。一歳年下だ。

初雪はいのち短く地に帰る

十二月二十四日 棺を打つ釘音骨にしむ寒さ

十二月二十八日 事も無げ村の小川の年の暮れ

年の瀬に高みにあるぞ屋根修理

十二月二十九日 内海を包むコスモス 大いなる円を描いて年の瀬の月

十二月三十日 一年のとどめに蜂に刺されけり

十二月三十一日 万両に晦日の雨の白い玉

冬扇で風呂焚く煙逐う晦日

一九九四年正月
徐山亭 謹製

「闇が 宿命の法により…」
マラルメ

闇が 宿命の法により、わが脊椎の節々の
欲望と痛み、あの古めかしい夢を 脅迫した時に、
陰鬱窮まる天井の下で 死ぬ想ひに苦しめられて
わが心中に 夢は その不惑の翼を 畳んでしまった。

おお黒檀の部屋、この豪華、空の王者を魅するため
名だたる星の唐草が その寂滅裡に絡み合ふ 夜よ、
己自身の信仰に幻惑された孤独者の眼にとつて、
汝はただ闇黒により欺瞞された慢心にしか過ぎない。

さうだとも、この夜の遙か彼方に、地球が偉大な
光輝の異常な神秘を、醜悪な世紀であるが、なほ光輝を
暗くは為ない世紀の下に、なげてゐるのを、知つてゐる。

空間は、生長をすると為まいと、それ自体と同じく、
この倦怠の中に、卑しい火焰を転々させてゐる、一天体の
精神が、祝祭にあたつて、點火されたことの證人として。